

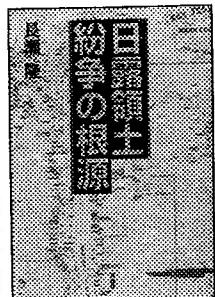
私の読書日記

日露領土問題、昭和史のおんなど

米原万里
ロシア語会議通訳・エッセイスト

×月×日

ソビエト期の歴史や地理の教科書は、ソオーリ時代の支配層による自国民搾取については罪悪視するものの、ロシア帝国の領土拡張については限りなく絶賛に近い形で擁護していた。中央アジアのイスラム圏もコーカサス諸国もバルト諸国もシベリア・極東の諸民族もすんなりロシアに併合され、そのおかげで発展したかのような叙述（ソビエト崩壊後の教科書でもブーチンの発言でもこの傾向は変わらない）に接するたびに、共産主義よりも民族主義の方がはるかに強力に人々の心を支配している、と思ったものだ。長瀬隆著『日露領土紛争の根源』（草思社二三〇〇円+税）を読んで、ロシア人の領土への執着が、一〇月革命よりはるか以前から脈々と続いてきた国家による情報操作の成果であると思えてきた。本書はその具体例を、樺太・サハリンをめぐるロシアの文献を詳細に検討することによって浮き上がらせた力作である。



今現在も日ロ関係の喉元に

てしまった、というのだ。

一ボルトは林蔵を「樺太が島であることを最初に発見した」と

早稲田でロシア文学を専攻したこと

。

ソビエト期の歴史や地理の教

あることを最初に発見した」と

。こともあって、一八九〇年に訪

。

ソビエト期の歴史や地理の教

あることを最初に発見した」と

。

可能な情報がいくつも記されていることを、長瀬は両文献を付き合わせながら証明していく。

チエーホフは明らかにドイツ語版を読んでいるのにそれを秘したのはなぜか。これを解き明かすプロセスは、暗号解読と推理小説が合体したような面白さだ。『帝国主義論ノート』の中で「露日戦争は帝国主義国同士の略奪的戦争」と論じたレーニンのリアルタイムの日露戦争観とスター・リンの復讐史観との矛盾を突くあたりも、一部日本の学者が後者に迎合していると指摘するくだりも一読の価値あり。

文春図書館